

和 牛 的 酪 農

中国農試 中 野 正 雄

この間ある酪農の研究会で、中国地方で広くみられる1～2頭飼いの付帯的酪農のことを「和牛的酪農」といったところ、それは一体どんな内容のことかとの質問がでた。

ご存知のように、関西以西以西では、和牛は1ヵ年間に僅か10日しか働かず、年間の大部分は畜舎で徒食しているために、口の悪い連中より糞畜とそしられているが、同じように乳牛であっても乳も、充分出さず、採糞的な役割を果している副業的酪農が少なくない。このように、和牛のような糞畜的役割と、残渣的飼い方とによって、零細な経営の枠の中で、引き合わないところばしながらつづけられている乳牛飼育のことを、このような言葉で言い現わしたまでである。

元来和牛と役牛とも云われるように、春は水田の耕起や代掻、秋は麦播準備の耕耘砂土畦立などに一役買って、人間労働を軽減し、エサも藁と田畑の畦畔草を主体とし、それに麩、糖、クズ米や野菜グズなどで飼われ、排泄する年間に12トンの厩肥や尿は、米麦の再生産に還元されている。こうした、米麦従属した和牛飼育は、和牛をして米麦作と切っても切れない因果関係を結ぶ結果になった。たまたま、この中に役牛の身替りとなって入ってきたのが乳牛であった。

このために乳牛は本来の乳を生産する役割の他に、和牛の仕事をも押しつけられたのである。即ち、乳牛の役利用もそのよい例であり、エサも稲ワラと野草、それに麩や糖を主とし、それに、山陰ではレンゲ、山陽では不足分を購入飼料で補充するという飼料給与の仕方にもこのことが証明される。

また、経済的には、副業の地位に甘んじて、経営の太い柱とはならないで、日陰者扱いにされている。

そうして、その目的は稲作の増収と肥料費の節減とにおかれている。

このように、水田地帯の乳牛は、昔からの和牛的な飼育慣行にしばられて、乳牛の持っている能力を充分発揮することができず、いうなれば、鳴かず飛ばずの酪農になるのが、西日本での実態である。これを「和牛的酪農」と私は表現したのは云いすぎであらうか。

それでは、「和牛的酪農」から、経済ペースに乗った酪農にするにはどうすればよいか。

それは一言にして云えば、飼料問題、それもとくに牧草の上手な作り方と与え方に尽きると思う。しかし、現在の酪農農家の多くは、残念ながら、高い能力の牛を飼うことのみを急いで、よい草作りには無関心の農家が不思議なほど多いのである。

高等登録牛のことには家庭で飲む乳まで我まんし、血まなこになって努力する農家も、こと牧草作りに至って冷淡である。

「よい土、よい草、よい乳牛」という酪農のモットーを更めて思い出したものである。

岡山県の真庭郡二川村や川上村でみるように、牧草改良によって立派な成果をみせたジャージー地帯では、まず土作りから始めてよい草を作り、成功した好例である。

この他、岡山県津山市や落合町では、ホルスタインの多頭飼育のために、水田に飼料作物を数年間栽培し、その後また水稻を2～3年作るといふ、田畑輪換の土地利用方式が、農家自身の工夫によって生

まれるなど、草作りもようやく軌道に乗り出した感があるのは、まことに心強い限りであり、いわゆる「和牛的酪農」の発展的解消の日の一日も早いことを心から祈らずにはおられない。

飼 料 作 物 の 育 つ 土 壌 の 酸 度

耐酸度	作 物 名	土 壤 酸 度										耐酸度	作 物 名	土 壤 酸 度									
		4.5	5.0	5.5	6.0	6.5	7.0	7.5	8.0	8.5	4.5			5.0	5.5	6.0	6.5	7.0	7.5	8.0	8.5		
強	えん麦										弱	ルーサン									
中	トウモロコシ										中	アイサイクローパー									
弱	大豆										中	チモンシー									
中	カブ										弱	オーチャードグラス									
中	ラヂノクロパー										弱	イタリアンライグラス									
弱	赤クロパー										弱	コロモンベッチ									

— 最 適
..... 生長できる